

## 巻頭言

＜技術環境研究所 上草 貞雄＞

本学会も創立 19 年目を迎える。大規模学会ではないが、その特徴を生かし活発な議論を自由に展開できるのは、他学会には見あたらない希少価値がある。

ただ、学会の標題とする「総合知」がいかなるものであるかを、他から観たばあい、やや分かり難い場合があると思われるので、これに関し、学会創立以来の会員として、以下に記しておきたい。

古来の総合知は、ご存じのように哲学であった。哲学的疑問が諸学問の始めであったし、その根源に迫ろうとする思考は、17 世紀において科学が生じ哲学的思考法が変化を受けたにしても、いぜん、緒科学の基礎にあると考えられる。ただし、学問として分化した緒科学が近代文明をもたらしたその陰で、従来の哲学がその存在感を小さくしているのは間違いないことであろう。

筆者自身のことを申すなら、ドクターアルバイトが終わり多少気が抜けていた若い頃、勤めの途中で書店に立ち寄ったさい、「狂ったサル」なる本を手にし、帰りの電車の中で大方読み終え、大きく考えが変わった。それは、1937 年ビタミン C の発見でノーベル賞を受賞した S・ジョルジュによる自伝であった。

第 2 次大戦でドイツが勝ち進んでいた頃、彼の元にヒトラーからハンブルクにある兵器工場を見学することを要請する書簡が届いた。要請はすなわち命令であり、工場を一巡りして最後に紹介された工場には瓶がところ狭しと並んでいた。案内人が彼に言う「貴方のお陰で、我々は現在戦局を有利に進めることが出来ています」。訳を尋ねたら、工業的に生産したビタミン C を U ボート（潜水艦）に積むことにより、潜水時間が長くなり海洋での戦力が向上した、と言うことであった。その帰り彼は意気消沈していた。その後彼は、友人のアメリカへの亡命に尽力し、彼自身も亡命先のアメリカで研究を続けるとともに、1960～75 年のベトナム戦争における精神的後ろ盾となったのは、知る人ぞ知るである。

彼の本から受け取った私の考えは、私が進めていた拙い工学研究も、その中立的なはずの科学的成果が、いとも簡単に人の命を奪うことに荷担しえると言うことであり、その結果、私自身の狭量さに驚くと共に、その後広い視野を求めて彷徨い「知の総合」に向かうこととなった。

すなわち、総合の知は、これまで多岐に分化を続けてきた学問領域のそれぞれが、蝸壺化し、人々の生きるための知性において、極端な断片化を惹き起すと共に、広く誤解を産む原因をも創っているのではないか、それが東日本大震災における原発事故として 2 次災害を生じたことは銘記すべきであろう。

17 世紀に近代文明とともに緒科学が分岐しつつ発展すると共に、学問領域の情報量は増大したものの、反対に諸学問間の有機性は疎かになり、蝸壺化の傾向を見せているのは、我々人間社会の「生」の在り方を不明確にすると共に、権力の介在を許し易い状況を創りあげた。その一例が、前述の S・ジョルジュが経験したことであった。

彼が直面した危険な事態は、今後とも増えはすれ、減少することは期待できない。彼が直面したような事態を避けるには、我々一人ひとりが社会諸現象に対して客観的な視点を持つことであろう。

いわゆる最先端の哲学者になることは困難であるにしても、古代ギリシャの哲学的視点でもって、知の有機性を取り戻し、何が真実であるかを自律的に求めようとすることはできる。それを繰り返すことにより、生のための自らの「総合知」が拓けてくると思うのである。